

今の日本人は、多種多様な抗菌グッズを愛用し、とても綺麗好きな民族になった。この日本人の綺麗好きさがこれからどこに繋がっていくのかを考えてみたい。

今から2年ほど前、宮崎県で、口蹄疫に対する防疫対策として20万頭以上の牛や多数の豚が殺処分された。その映像がマスコミを通じて提供されなかったからか、綺麗好きになった日本人は、口蹄疫に罹患した牛肉や豚肉が口の中に入ってこないという安心感（＝綺麗なままでいれる）を抱くことができると、それ

以上考えることもせず、消極的であれ口蹄疫ウィルスに罹患した牛や豚に冷たい視線をおくった。また同じ頃、普天間基地の代替施設移設問題が起きると、マスコミは鳩山由紀夫元首相の言動の変遷をクローズアップして、新橋駅の前を行き交う人々に元首相の無責任発言を問うことはあっても、「代替施設を貴方の故郷に移転してもいいですか？」と問いかけ、移設問題が国民全体の問題であることを想起させることはなかった。質問に答える国民も、自分たちが居住する環境に一切影響がないこと（＝綺麗なまま

でいれる）を当然の前提としたまま、元首相の無責任発言にあれこれ注文を付けても、無意識的に沖縄県民に対して冷たい視線をおくっていたと言わざるを得ない。少なくとも今の日本人は、小さな国に一緒に住んでいるにもかかわらず、自分の近くで起きていない様々な出来事に対し、無関心とまでは言わないまでも、表層的な関わり合いを持ち続けることが得意になった。

昨年、大物タレントが山口組幹部と昵懇の間柄にあるとの「黒い噂」を理由に芸能界から追放された。

人は誰しも暴力団から暴力を加えられたり、お金を請求されることは望まない。そのための法律や条例が制定されることは歓迎すべきだ。しかし、我々の目の前に提示されている現状は、綺麗事で済まされるような簡単な内容ではない。

暴力団排除条例の基本理念は、「暴力団を恐れない」「暴力団に金を出さない」「暴力団を利用しない」「暴力団と交際しない」の4つ。この条例によると、暴力団員と継続的に交際や接触があり「密接交際者」の烙印を押されてしまえば氏名が公表され、銀行融資も受け

られない事態が生じる。しかも、後日、その烙印が司法の場で誤りだったと判明しても、一度、烙印を押され、名前も公表され、銀行融資を受けられない事態がすでに生じていれば、会社経営者ならば、倒産してしまうことも。

「密接交際者」であるかどうかという判断はそれほど簡単なことではない。警視庁が出している「東京都暴力団排除条例」Q&Aでは、暴力団員と幼なじみの間柄だとか、親族や血縁関係者に暴力団員がいる者は、それだけでは「暴力団関係者」には当たらないと注意書きがされているが、どのような付加的な事情が加わると「暴力団関係者」や「密接交際者」との烙印を押されるのか、その判断は容易ではない。東京都暴力団排除条例では、契約の相手方が暴力団員ではないことの確認を市民にするよう努力義務を課している。暴力団関係者かどうかの情報は警視庁ホームページなどで、また暴力団関係者ではないことを事前に表明してもらおうと表明確約書を提出して貰うよう求めている。つまり、一般市民に判断が容易ではない暴力団関係者であるかどうかという点をチェックさせ

る社会が目の前に来ているのだ。日本人は色分けが好きだ。少しでもグレーの色彩が認められればそれをク口として排除し、綺麗好きな者のみでコミュニティを構成してゆく。しかし、このようなコミュニティは「水清ければ魚棲まず」（雑誌『表現者』2012年3月号）のように息苦しい、画一的な発想を深く共有する空間でしかない。市民に暴力団関係者であるかどうかの選別をするよう努力義務を課するという発想自体、危ない思想だ。一義的ではない抽象的な基準で、市民に何らかの決断をさせる場合、拡大解釈してエスカレートする傾向があることは我が国の歴史が証明している。

もし、私たちが線引きを間違えれば、暴力団（員）と何らかの関係をもった一般国民から仕事と家族を奪い、謂われなき「村八分」を押し進めることとなる。「綺麗好き」な日本人が「排他性」を強めることは想像に難しくない。それが杞憂であるかどうかは、ヨーロッパ中世期の「魔女狩り」や、戦前、共産主義者、労働組合運動家、宗教団体がさまざまな理由から迫害・弾圧されてきた我が国の歴史的事実から私たちが何を学んでいるにかかっている。

## 律談

### 法相 R

#### 「綺麗好きさ」と「排他性」との近似性

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。「高橋・日浦法律事務所」代表。